

スタッフの団結を生む生産性向上

特別企画

「残業ゼロ！」だけじゃない効果

生産性向上やICT化の目的や効果は、ムダを省いた効率的な業務運用や、それにより本来業務に注力する時間が増えることだ。厚労省の生産性向上モデル事業に参加する等、予てより積極的に取り組んできたりんごの里福寿園居宅介護支援センターでは、上記のほかに、居宅のケアマネジャーの団結や信頼感が増す効果もあったという。その具体的な進め方をみていこう。

残業の多さを改善したい！ 生産性向上モデル事業に応募

始まりは2019年。介護現場における生産性向上の取り組みについての認識は「介護現場でのこと」「少人数で多くの作業をこなす工夫」であるという理解でいたような気がします。

居宅介護支援事業所における生産性向上についてあまり理解ができていない状況でしたが、モデル事業の取り組みを知り、応募したところ当事業所も採択された事業所のひとつとなりました。

当時は私も含め、残業が当たり前の状況でした。管理者である私の大きな心痛は、事業所内で中心的に活躍してくれている、2人の主任介護支援専門員の残業の多さでした。帰りたくても帰れないという状況を改善したいという強い思いで、生産性向上モデル事業に応募したことを記憶しています。

モデル事業に取り組む前から、利用者ファイルの綴りの統一、記録内容の統一を行っていました。また、記録の工夫として、法令根拠に基づく内容や、加算算定等の文章の文例集を作成し、分担して記録システム^{※1}にマスターデータとして登録しました。そうすることでワ

ンクリックで長文が入力され、私たちはトピックスを加える程度でしたので、入力に係る時間短縮ができていましたし、入力する内容は必然的に統一されます。新任の職員は、制度の理解や、法令順守の必要性の理解が不十分な可能性があるため、文例集を渡していました。そのほかに、標準化の工夫として、年一回程度、お互いの利用者ファイルをチェックし合うダブルチェックをしていました。制度改正時には、各自の解釈を統一するために全員で改正内容の読み合わせを実施していました。

居宅介護支援における生産性向上とは業務を見直し、「利用者に質の高いケアを届ける」「利用者に向き合う時間を増やす」「自分たちでどう質を高めるか考えていくこと」であり「介護支援専門員の質を高める」に繋がります。具体的に質を高めるということは、①人材育成、②ケアマネジメントの質の向上、③情報の効率化が挙げられるかと思えます。

実際の生産性を向上させるためには「In put」「Out put」の間にある、過程「process」に着目して、自分たちでどう質を高めていくか考えながら取り組むことが重要になってきます。モデル事業の具体的内容は、最初にワーク



執筆 ▶
石橋裕子

社会福祉法人横手福寿会 りんごの里福寿園居宅介護支援センター
管理者 主任介護支援専門員